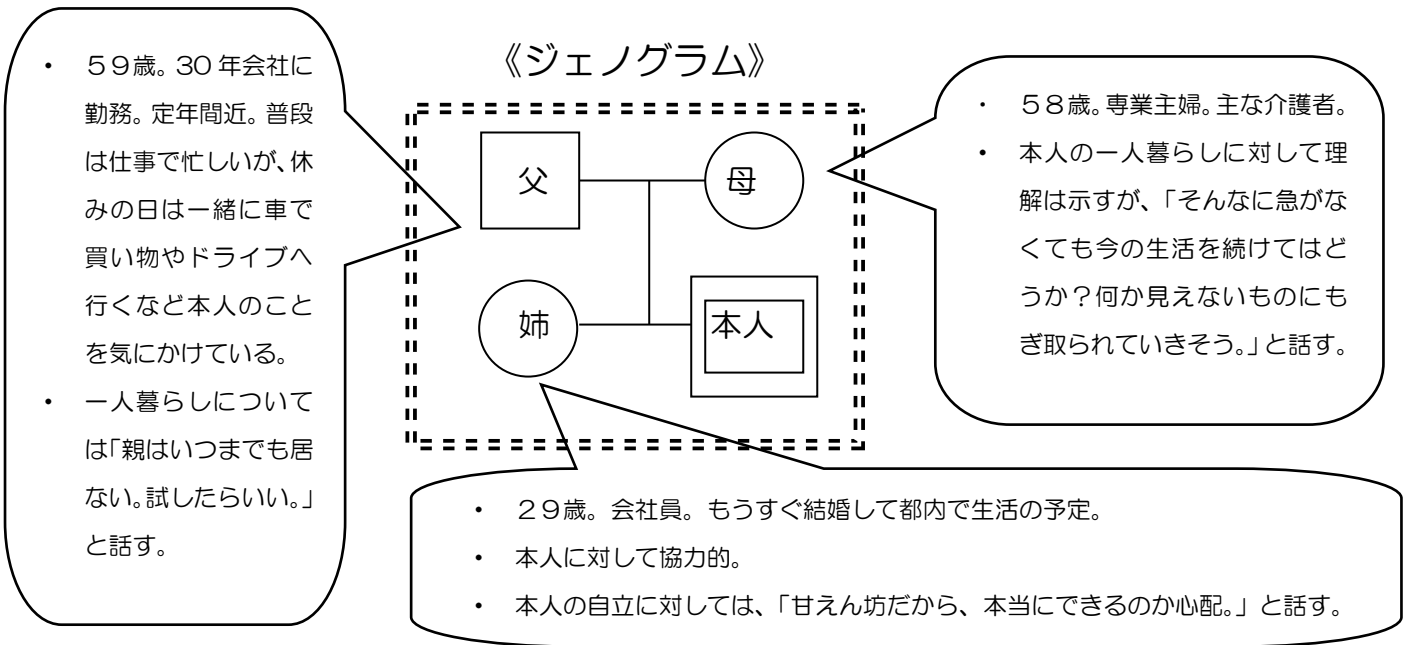


【演習1 事例の概要】

氏名：神奈川 太郎 氏（27歳男性） / 障害名：脳性麻痺による四肢麻痺
 身体障害者手帳 1 級 / 障害支援区分5 / A市で両親・姉と 4 人暮らし
 食事：スプーンで自立。入浴：洗体は一部介助。浴槽への出入りは介助。
 排泄：大小とも洋式使用。介助が必要（便座への移乗、下衣の上げ下げと後始末）。
 更衣：上下とも一部介助。
 移動：自宅内は手足移動（いざり這い）。自宅外は近隣なら電動車いす使用で自立。遠距離は家族の運転する車で移動。
 金銭管理：小遣い程度なら自分で可能。
 社会参加：特別支援学校高等部を卒業後は、A 市内の「エスカルゴ」（就労継続B）に週 5 日通所。母の車で送迎。
 趣味：「ロックバンドK（架空のバンド名）」のファン。母もファンであることから、月に 1 回母の付添いで渋谷でのライブへ行く。最近はパソコンで絵を描くことに興味を持っている。
 環境：自宅はT電鉄のA駅より徒歩 15 分。近隣は平坦な場所。住宅改造は終わっており、玄関はスロープ設置。居室は手足移動で生活できる環境。浴室は介助でシャワー浴をベースにした改造。洋式トイレもL字バーが設置済み。
 将来の希望：「将来は一人暮らしをしたい。もっと自分でできることを増やしたい。働きたい。」
 「いつまでも親を頼ることはできないので、介助者を探さなくてはいけないと思うのだが、どうやって見つければよいか？」



本人について（補足）

- ・ 就労については高等部在学中に実習を行ったが、結びつかなかった。
- ・ 他者との関わりやコミュニケーションなど適応面に問題は見られない。
- ・ 作業所は知的障害の方を主に対象。話が合う仲間が居ない。近隣には他に通うところも無いので、しかたなく通っている。
- ・ 先日、高等部同窓会でアパート生活を開始した同級生と会い、一人暮らしを考えるようになった。

【B 障害者支援センターと周辺の概要】

- ・ B 障害者支援センターは通所型の自立訓練（機能訓練）事業所である。場所は神奈川太郎さんの住む A 市の隣の B 市にある。B 法人が経営。定員は 15 名。理学療法士（PT）1 名、作業療法士（OT）1 名が勤務。看護師 1 名。生活支援員は 3 名。プログラムは PT・OT による機能回復訓練や自主トレーニングを実施するほか、看護師による健康管理。社会生活力プログラムとして、失語症のコミュニケーション・買い物・調理・市街地移動・交通機関利用・地域の資源や制度を学ぶ・余暇活用などのプログラムを持ち、必要に応じて同じ目的の方とグループワークや、個別で実施している。
- ・ 利用者の過半数は 40～60 代の脳血管障害による片麻痺で、高次脳機能障害の失語症や記憶力障害を持つ方もいる。また脊髄損傷の方も数名。神奈川さんのような脳性まひの方は他に 2 名居り、同じ学校の先輩と後輩。
- ・ B 障害者支援センターは B 駅から徒歩 10 分。自宅最寄りの A 駅から T 電鉄で 3 つ目。
- ・ B 障害者支援センターは地域に根ざした活動を続けており、地域のお祭り会場になっている。登録ボランティアも多く、近隣の大学サークルと提携している。建物の一室を地域交流場所として開放し、趣味の絵画や写真を展示したり、ボランティアの打ち合わせを行ったりしている。
- ・ 元利用者の中には、ボランティアとの交流を続けながら B 市内のアパートで単身生活をしたり、GH で生活している。また当事者のグループを作り、「街のバリアフリーマップ」を作るなど積極的に活動している。
- ・ A 市と B 市には、他に A・C・D の 3 法人がある。
A 法人は入所型生活介護施設（ショートステイ可能）・グループホーム・相談支援事業所を持っている。今回の相談は、この A 相談支援事業所の田中さんから。
C 法人は就労移行支援事業所（通所）・就労継続 B（今まで利用していた「エスカルゴ」）。
D 法人は入所型生活介護施設（ショートステイ可能）・就労継続 B（通所）・グループホームを持っている。
なお B 法人は、B 障害者支援センターのほか、通所型の生活介護事業も行っている。
- ・ T 電鉄は東京・渋谷へ一本で行けることから、A・B 市はベッドタウンとして栄えている。

